

2016年9月1日、BBCニュースは、ロンドンの金融街に就職しようとする労働者階級出身の若者が、面接に茶色の靴を履いていけば不採用になる可能性がある、という報告書の内容を報道しました。

シティと金融街は、伝統的に一部の階級が支配してきた世界。ここにおいて「ノー・ブラウン・イン・タウン」(シティではスーツに茶色い靴を履かない)をはじめとするいくつかの秘儀的な掟を知らない者は、排除される可能性が大きいことが報道されたのです。7月に就任したテリーザ・メイ英国首相が、就任演説で「英国を少数の特権階級でなく、すべての人のための国にします」と宣言しましたが、イギリスにはいまだ根深く、ある階級がその他の階級を排除する曖昧なシステムが機能しているのですね。

ここでいう特権階級や「一部の階級」は、ジェントルマン階級と

ジェントルマンと馬とブライドルレザー

文：中野香織

(エッセイスト・服飾史家・明治大学国際日本学部特任教授)



STAGE COACH

も呼ばれてきました。良いか悪いかという問題は別として、異国の部外者が憧れるイギリス的な要素の多くは、ジェントルマンの特権的な生活の延長上に考案され、醸成されたものです。

ジェントルマン階級というのは元来、大土地所有者が属する階級のことでした。富と権力をもつ彼らが野蛮だったら困るので、支配階級の男にふさわしい理想像が求められました。それが「ジェントルマンらしさ」であり、理想とされる美徳は、時代背景に応じて変化しています。20世紀以降は土地を所有するかどうかあまり関係がなくなり、「らしさ」だけが独り歩きしていきます。イスラム教徒サディク・カーン氏がロンドン市長になるほどグローバル化が進む現代においては、さすがに古色蒼然たるジェントルマンなど絶滅したかに見えますが、冒頭のBBCが報じたように、決して万人に開かれず、むしろ排他的で、それゆ

えに魅力的でもあるジェントルマンズ・ワールドは、連綿と存在し続けているのです。

ジェントルマンと馬

さて、土地所有者であるジェントルマン階級は当然、馬も所有しました。交通手段としても、また、狩猟など遊びの手段としても、馬とともに生きてきた彼らがスポーツ(気晴らし)として楽しんできた娯楽に、競馬があります。

所有する馬の美しさと能力を公の場で披露したい。その願望を満たすもつとも原初的な娯楽として始まった競馬は、イギリス発祥です。競馬と聞くと、日本では赤鉛筆を耳にはさみ競馬情報紙を手にするギャンブラーを連想しがちですが、イギリスでは「王のスポーツ」と呼ばれるように、王侯貴族の娯楽でもあります。毎年、6月におこなわれるロイヤルアスコット競馬は、名馬ばかりか、厳格な

Kaori Nakano

東京大学大学院修了、英ケンブリッジ大学客員研究員を経て服飾史家として独立、男女ファッション史から最新モード事情まで研究・執筆・レクチャーを行う。著書『紳士の名品50』(小学館)ほか多数。

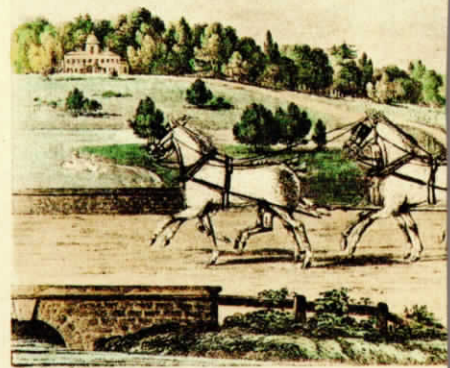
ドレスコードのもとに着飾る馬主や名士が集う、一大社交イベントです。エリザベス女王も熱心な競馬ファンで、馬主でもあります。「キングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス」の優勝馬オリオールを筆頭に、数々の優勝馬をお持ちであるばかりでなく、生産者でもあります。フランスオークスの優勝馬ハイクレアの曾孫に当たるのが、ほかならぬ日本の伝説の駿馬ディーブインパクトですね。

所有地のなかでごく当然のように馬を育て、愛で、その美しさと優秀さを披露するイベントを楽しむだけでなく、彼らは馬術もたしなみません。たとえば、女王の第2子にあたるアン王女は、馬術でモントリオールオリンピックに出場していますし、アン王女の長女ザラ・フィリップスは、ロンドンオリンピック総合馬術競技の団体で銀メダルを獲得しています。現代でも、王室メンバーが率先して馬の乗り手として活躍しているのです。

ブライドルレザーに見る ジェントルマン気質

そのように常に馬とともに生きてきたジェントルマン階級の人々の生活の延長上に、合理的で

かつてブライドルレザーは ジェントルマンの命綱でした



THE BIRMINGHAM

実用的なブライドルレザーが生まれました。おもがい、くつわ、手綱から成る馬勒(ばろく)をブライドルと呼びますが、これが切れると乗り手が落馬する危険があるため、耐久性のある堅牢な革を開発したわけです。牛革にロウをしみこませて革の繊維をひきしめ、しなやかさを保ちつつ頑丈に仕上げたのが、ブライドルレザー。馬具用という当初の用途を超え、財布などの革小物となって世界で愛され使用され続けています。興味深いのは、この革で作られた製品が愛される理由です。

ブライドルレザーの製品は、手に入れた時が最高ではなく、むしろ、手入れを続けることにより、年月とともに味わいと美しさを増し、持ち主のスタイルになり、やがては遠目からも所有者がわかる、代替品のない唯一無二の革製品に熟成していきます。これこそが、最初は堅くて白いロウの粉までふいているブライドルレザーが熱狂的に愛される最大の理由です。そしてまさにこの点が、いつの時代のジェントルマンも重んじてきた長期的な人間関係とも通じ合うのです。

彼らはたしかに新参者には排他的で、やすやすと友情を差し出すようなことはしません。しかし、

いったん高い敷居を超えてつきあいを始めたら、年月とともに関係を深め、とりかえのきかない強固な信頼関係を生涯にわたって築いていく努力を重ねます。2、3回飲んだだけで「心友」などとSNSでアピールし合う相手が半年ごとに変わっているような、いまどきの使い捨ての「友達」とは、まったく次元も質も異なる関係です。モノも人も使い捨てず、傷もえぐみも含めて長期にわたって慈しんでいく。そんな考え方がすべての時代を通じて、ジェントルマンの価値基準の根底に脈々と息づいているのです。

ブライドルレザーの製品を作り上げるのは、イギリスの熟練職人たち。ジェントルマンとは階級が異なりますが、それは上下の差ではなく、あくまで並列の、世界の棲み分けの違いです。彼らの熟練技術による精緻な手仕事をリスベクトする雇い主は、職人たちとも長期にわたる良い関係を築き上げています。

ブライドルレザーを愛することはすなわち、頑固で仕事に忠実な職人氣質と、優雅で排他的だけれど誠実なジェントルマンの歴史と生活とが織りなす、本物志向のイギリス文化の価値と共鳴し合うことでもあるのです。